

2025年度（令和7年度）学校評価自己評価表

駅家中学校区	校番 61	福山市立駅家西小学校
最終更新日		2026年（令和8年）1月30日

I 福山市

ミッション	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン	各中学校区・学校が、資質・能力の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容 各学校が特色ある教育活動を推進している。活動のねらいや内容も明確となっている。今後も学校と地域がより連携し、地域人材の活用、地域貢献等、地域の教育力を活かしながら児童生徒の主体的な探究学習を推進してほしい。	児童生徒の現状 ○全国学力調査では、全国平均を下回っている。低学力の子どもが多く、学力定着に課題がある。 ○児童生徒は地域への愛着があり、地域の方々との交流や地域貢献活動に意欲的に取り組むことができる。	育成する資質・能力 めざす子ども像（義務教育修了時の姿） 中学校区として統一した取組等	〈中学校〉思考力 コミュニケーション力・協調性 意志決定力・志 〈小学校〉課題発見・解決力 コミュニケーション力 挑戦する力 ○日常生活の中に課題を見つけ出し、自分の知識を総動員して答えを導き出す。 ○他者との関係を強制的に築きながら、自分の考えを発信し、仲間と課題解決する。 ○自分の人生を切り開き豊かな未来を創ろうと見通しや展望をもち自己決定する。 ○「主体的な学びによる思考力・判断力・表現力の育成」を研究テーマとする。 ・学力調査の分析から課題をつかみ具体的な手立てを研究し、授業改善を進める。 ・自分の考えや思いをもたせ、相互交流の中で考えや思いを深める、全員参加の授業づくりを目指す。
--	---	---	---

III 自 校

ミッション		資質・能力		課題発見・解決力		コミュニケーション力		挑戦する力	
希望ある未来、駅家・福山の担い手となる「生きる力」の育成		めざす子ども像	低学年	○身近な問題に対して疑問をもち、自分なりに導き出した答えを表現・実行する力	○自分の役割に責任をもつ力 ○自分の考えを伝える力	○学級・学年や家族の一員であることを自覚し、主体的に学ぶ力			
学校教育目標			中学年	○地域や社会の問題に対して、もっている知識を関連付けて考え、自分なりに導き出した答えを表現・実行する力	○自分の役割や言動に責任をもったり、助け合ったりする力 ○自分の考えを伝え、相手の考えを比較してしながら聴く力	○学校や地域の一員であることを自覚し、主体的に学んだりチャレンジしたりする力			
確かな学力と豊かな感性に培い、仲間とともにやりぬく子どもの育成			高学年	○様々な問題に対して、もっている知識や経験等をフル活用して考え、自分なりに導き出した答えを表現・実行する力	○自分の役割や言動に責任をもち共感的に聴きながらアイディアや知識を共有し深める力	○地域・社会の一員であることを自覚し、持続可能な社会に向け、主体的に学んだりチャレンジしたりする力			
現 状			1年	○目と耳と心で聴くことができる。 ○言葉・数・情報を用いて根拠をもって表現できる。	○目と耳と心で聴くことができる。 ○言葉・数・情報を用いて根拠をもって表現できる。	○自分の人生を切り開いて豊かな未来を創ろうと学び続ける態度を養おうとしている。			
〈児童生徒〉 ○振り返りの時間を確保することで、自分の思いや考えを言葉や文章で表現することができるようになってきた。 ○互いを理解し合い、思いやりのある言動が増えている。 ▲基礎学力をさらに定着させる必要がある。 ▲特別支援の観点から、通常学級において配慮が必要な児童への手立てが必要である。			2年	○一人一人が自分の考えをもって他者と対話することができる。	○他者と話し合い考えを比較し統合しながらより良い考えを創造できる。	○自分の人生を切り開いて豊かな未来を創ろうと学び続ける態度を養おうとしている。			
			3年	○日常生活の中に課題を見つけ出し自分の知識を総動員して答えを導き出す。	○他者との関係を協動的に築きながら自分の考えを発信し仲間と課題解決する。	○自分の人生を切り開いて豊かな未来を創ろうと学び続ける態度を養おうとしている。			
		研究	教科等	算 数 外国語					
			主題・内容等	「主体的な学びによる思考力・判断力・表現力の育成」 ～㊦らんでみよう！㊧いてみよう！㊨ってみよう！ しんじあう友㊩ はっ㊪んしよう！～ 全員参加の授業づくりに向けての教材研究					
		めざす授業の姿	全員が学びに向かう授業 子ども達が自分の考えをもち、自分なりの方法で表現している授業						

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立駅家西小学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)				最終評価(2月末)				
							□指標に係る 取組状況	力セ 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	力セ 評価	達成 評価	総合 評価	改善方策
3	主体的で対話 的な学びを通 じた学力の定 着	★	見 直 し	対話を通して協 同的な学びにな るよう、粘り強 く学び続ける授 業づくりと学力 向上	- 子ども達が 当事者意識を もてる授業に していくこと で、必然的に 対話が生ま れ、自分なり の方法で表現 したいと思え る授業展開を 目指す。その ために、45 分の中で3回以 上はペアトー クを入れるこ とで、全員が 参加にする。 - 学力の定着 を図るため に、どの学級 でもスキルタ イムで復習等 に取り組む。	- 児童アンケー ト「自分の考えを みんなに伝えて います。」 肯定的評価 85%以上 - 算数科の知識・ 技能において、単 元テストの結果 が 40%未満の 児童 20%未満	- 児童アンケートの結 果は 80.4%であっ た。成果として、児童 同士の対話は以前より 活発になり、自分の考 えを相手に伝えたくな る授業改善が図れてい る。 しかし、対話の内容 や理解を深めたり、よ り児童自身が達成感の もてる取組にするため に、質的な向上を図る 必要がある。 - 算数科のテスト結果 では、40%未満の児 童 2.2%であった。ス キルタイムで既習事項 の復習に取り組んだ成 果といえる。	3	3	- 対話的な学 びをより質的 に向上させる ために、「たし かめトーク」 「ひろげるト ーク」「ふかめ るトーク」「つ たえるトー ク」の4種類 のペアトー クを活用し、授 業改善に取り 組んでいく。 - 引き続き、 スキルタイ ムやデータバ ースを活用した 習熟的な学習 に取り組む。	- 児童アンケートの結果 は 82.4%で、前回より も 2%上がっていた。成 果として、教師側が「こ を考えさせたい!」と いうことを明確にしてベ アワークを行うことで、 回数以上に対話の目的 (内容)に重点を置いて 授業改善を図ることがで きた。 一方で、「ひろげるト ーク」「ふかめるト ーク」が児童にとって難し いことが分かった。これ らの対話を充実させるた めには、「問い」の吟味 が重要である。 - 算数科のテスト結果で は、40%未満の児童は、 3%であった。授業にお ける習熟の時間やスキル タイムを通して、既習事項 に繰り返し取り組んだり 、問題データベースを 活用し、習熟具合に応じ て問題を選択して取り組 んだりした。	3	3	3	「ひろげるトー ク」「ふかめるト ーク」を充実させる ために、単元構想 の段階で児童の思 考を段階的に促す 問いをあらかじめ 整理するなど、よ り児童に寄り添 った授業改善(特に 教材研究)に取り 組み、対話の質を 高める。 - 算数科における 基礎学力の定着を 図るため、授業(導 入時、練習問題、単 元における習熟の 時間等)やスキル タイムを通して、 繰り返し学習に取 り組む。分散学習 の視点で繰り返し 学習を計画する。 授業者がつまず きやすい既習事項 を分析した上で内 容を精選し、個に 応じた復習ができ るようにしたり、児 童が自分の学習状 況やつまずきを把 握し学習を進め たりできるようにす る。
3	児童がいきい きと学べる学 校づくり		継 続	児童の自己肯定 感の向上	毎月の振り 返しカードを 実施し、保護者 からも児童に 対しての頑張 りを評価して もらい、学校と 家庭で肯定的 な声掛けを行 っていく。(毎 月)・縦割り班 遊びや、縦割り 班掃除を実施	- 児童アンケート 「自分には良いと ころがある」 肯定的評価85%以上 - 各月の振り返り カードでできたこ とを確認し、1つ 以上チェックが付 く児童が95%以 上。	- 児童アンケート「自分 には良いところがある」肯 定的評価85.9%。 - 各月の振り返りカード でできたことに1つ以上 チェックが付いた児童が 100%。 毎月の振り返りカー ドで自己評価を繰り返 し行うことで、自分の できていることに目が	3	3	児童アンケー ト「自分には良 いところがある 」で否定的評 価をしている児 童に対して、教 師が意図的に肯 定的な声かけを したり、保護者 との連携を密に 取ったりしてい く。	- 児童アンケート「自分 には良いところがある」の肯定 的評価は88.1%。 - 各月の振り返りカードで できたことに1つ以上チェ ックが付いた児童が 100%。 - 毎月の振り返りカードで 日々の授業態度や、行事へ 取り組む意欲度を自己評価し たり、保護者・教員から評	3	3	4	学年が上がるに つれ、自己肯定感 が下がる傾向があ る。日々の授業や 行事の後に、振り 返しをする時間 を十分に取、こ どもたちの「良 さ・頑張っている こと」を具体的に 伝えていく必要 がある。 また、縦割り掃 除・縦割り遊びの

				することで異学年交流の充実を図る。		向く児童が増えてきている。また、縦割り班遊びや、縦割り班掃除を実施することで異学年での関わりが増え、高学年を中心に自己肯定感が高まっている。			また、縦割り班での活動を充実させ、異学年の関わりを増やしていく。	価してもらったりすることで、自分の良さや頑張っていることに目が向くようになってきている。また、毎日の縦割り掃除や、ロング屋休憩による異学年交流の充実が、自己肯定感の高まりにつながっている。				充実により、異学年交流を深め、高学年の自己肯定感を高めていく。 ・自己肯定感が高まった姿とはどのような姿かを整理し、指標の項目の再考を行う。
		見直し	体を動かすことの楽しさに気づき、自ら体力づくりに取り組む態度の育成	導入での運動遊び(主運動に繋がる前段運動(高跳びの場合はスキップ鬼ごっこ等)や体力づくりカード、体育館遊びなどを活用する。 職員の握力の記録掲示を継続して行うことで、目標をもって取り組むことができるようにする。	・握力の記録が県平均を超えている児童が83%以上(12項目中10項目達成する) ・児童アンケート「体を動かすことが楽しい」 <u>肯定的評価88%以上</u> 「体育の授業で自分の目標を決め、目標を達成できるよう取り組むことができた」 <u>肯定的評価80%以上</u>	・握力の記録が県平均を超えている児童の割合は40%であった。(10項目中4項目) ※1年生は握力未実施 ・児童アンケート「体を動かすことが楽しい」の肯定的評価は88.7%であった。 ・「体育の授業で自分の目標を決め、目標を達成できるよう取り組むことができた」の肯定的評価は85.6%。	3	3	・設置している握力計は継続して児童に取り組ませる。 掲示物は、新しく赴任した教員の記録やプロ野球選手の記録を入れたものに貼り換え、児童の意欲の高揚を図ることで、握力を鍛える。 ・県平均との比較に加えて、自己記録が伸びた児童80%を目指す。自己記録を把握したり伸びを実感したりすることで、自ら体力づくりに取り組めるようにする。	・1月末に握力の再テストを行った結果、自己記録が伸びた児童の割合は、以下の通りである。 2年生…50% 3年生…46% 4年生…91% 5年生…67% 6年生…70% 全体…65% 握力の再測定をする際に、測定のコツを具体的に提示することで、児童が意欲的に目標をもって取り組むことができた。 ・児童アンケート「体を動かすことが楽しい」の肯定的評価は91.0%であった。 ・「体育の授業で自分の目標を決め、目標を達成できるよう取り組むことができた」の肯定的評価は89.3%であった。	3	3	3	・本校の体力面の重点課題である握力・上体起こし・50m走を児童に伝え、身近な記録を目標として掲示することで、自主的に握力計測することや、関心を継続させる。 ・委員会活動の運動遊びで児童が体を動かす機会を設ける。また、重点課題を明記した振り返りカード等を活用し、児童が目的意識をもって運動をしたり、自己の伸びを感じさせたりする取組を継続して行う。
3	保護者・地域に信頼される学校づくり	継続	地域の人材と協働した学校づくり	地域の人材を生かしたカリキュラムマネジメントを行う。	・保護者アンケート「子どもを駅家西小学校に通わせてよかったと思う」 <u>肯定的評価95%以上</u> ・各学年、年間3回以上は地域の人材を生かしたカリキュラムマネジメントを行う。	・保護者アンケートの結果、肯定的評価97.6%。肯定的意見の理由として「楽しく通っている」「教職員の丁寧な関わりや声掛け」等が挙げられていた。 ・現在、全学年1回以上、地域人材(外部人材)を生かした授業を行っている。夏季休業中には、地域の企業と	3	4	・教師が子どもをよく見ること、そして丁寧な関わりや声掛けを継続することで、子ども一人一人が学びに向かう教育活動を継続して行う。 ・外部人材との連携・打ち合わせを密にし、授業を行う。また、	・保護者アンケートの結果、肯定的評価は97.9%であり、目標値95%以上を達成した。「子どもが楽しそう」「教職員が丁寧にも向き合ってくれる」等の肯定的意見が見られる。 ・全学年が、年間3回以上、地域人材(外部人材)を生かした授業を行った。外部から学ぶ機会を	3	4	4	・こどものつまずきや困り感、想いを捉え、丁寧な関わりと声掛けを継続する。また、保護者との連携を密にすることで、子ども一人一人が学びに向かう教育活動を今後も行う。 ・学校外から学ぶだけでなく、「学校外へ働きかける学び」という視点で

							の打ち合わせも行って いる。			た、学習内容の 横断的な関連 の視点で、カリ キュラムの見 直しを行う。	多く設けた一方、外部に 学校から働きかける取組 が不十分であった。				カリキュラムマネ ジメントを行う。
3	教職員が元気で、児童に向き 合える学校づく り		継 続	授業づくりのた めの時間の確保	月に2回、学年 会を設定し、主 体的な学びに 向けた教材研 究を行う。	・職員アンケート 「子ども主体の授 業づくりにチャレ ンジしている。」 <u>肯定的評価90%以上</u>	・職員アンケートの結 果、肯定的評価は 100%である。その 中で、「こどもの実態 やつまずきに応じた授 業づくりの改善」や 「教材研究の時間と内 容」が次の課題として 挙げた。 ・学年会の中で、教材 研究や授業づくりにつ いての振り返りを行う 時間を設けた。 授業づくりの時間を 確保するため、会議内 容をデータ化し、口頭 提案の精選を行うな ど、業務改善に取り組 んだ。	3	3	・教材研究や 授業づくりを 協働・対話する 機会を継続し て設けること で、互いの授業 づくりや教材 研究について 学び合う場を 充実させる。こ れまでの月2 回の学年会に 加え、暮会後 10分間研修の 時間を活用す る。また、教材 研究ノートの 交流や情報提 供など、教材研 究の内容や方法 について研修 する機会を、 10月以降に2 回以上行う。 ・時間確保の ために、左記の ような業務改 善アイディア の声を拾い上 げ、試すことを 続ける。	・職員アンケートの結 果、肯定的評価は100% である。標準学力調査と 関連する授業場面を取り 上げ、全体交流やペアト ークをどのように進める か、具体的に協議する研 修を行った。実際の授業 場面に即してより具体的 に教材研究を行う場を設 けることで、互いの教材 研究を交流することがで きた。 ・学年会等で継続して教 材研究や授業づくりにつ いて考える場を設けてい る。	4	4	4	・今後も学年会や 授業づくりにかか わる研修を通し て、授業づくりに ついて考える機会 や互いの授業づく り・教材研究を交 流する機会を設け る。 教材研究や研修 の内容を検討・精 査し、一層の充実 を図る。

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]	
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度 十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度 概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度 ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度 あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度 目標を達成できなかった。